

コロナ後遺症 高齢者長期化

新型コロナウイルスの患者約12万人の臨床データを解析した結果、高齢者は後遺症としてうつなどの発症割合が高い上、約2~5割で長期化していることが25日、医薬基盤・健康・栄養研究所(大阪府茨木市)などの大規模調査で分かりました。10万人超の規模での研究は国内初といいます。

同研究所などは、2020年1月~22年6月に全国で新型コロナ陽性と診断された0~85歳の患者12万2045人について、電子カルテ情報を解析。その際、アルファ株やオミクロン株など流行株ごとに診断時期

うつなど発症割合高く

新型コロナ後遺症の主な傾向 (12万人対象の大規模調査)

- 頭痛や倦怠感などは約1割で長期化する
- 高齢者ではうつなどの発症率が高く、約2~5割で長期化する
- 高齢者ではコロナ発症後、要介護度が上がった
- オミクロン株などの流行期では、発症率が大幅に低下した

*医薬基盤・健康・栄養研究所の発表を基に作成

を三つに分けました。後遺症の時期について、「急性期」から2週間以内を「急性期」、その後を「慢性期」と定義しました。

頭痛の発症率は、いずれの診断時期も急性期では2%台でしたが、その後は約1割が慢性期まで継続していました。倦怠(けんたい)感や味覚障害も同様に、約1

60歳以上の高齢者では、うつなどを発症する割合が他の年代よりも高く、慢性期まで継続する割合は約2~5割に上りました。コロナ発症後と要介護度が上がる傾向も見られました。

後遺症全体の発症率は、オミクロン株流行期には大幅に減っています。ウイルスの性質変化やワクチン接種の推進が影響した可能性があります。

同研究所感染メティカル情報プロジェクトの今井由美子リーダーは「後遺症はない。特に高齢者はうつなどが悪化しやすいので、感染後は慎重に経過を見ることが必要だ」と話しています。

割が慢性期まで続いていることを示す。